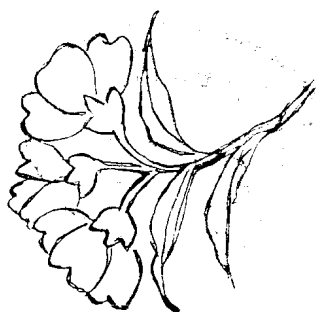


剥製

三浦哲郎



剝 製

©1970

昭和四十五年七月十日 初版印刷
昭和四十五年七月十五日 初版発行

著 者 三 浦 哲 郎

発行者 中 島 隆 之

印刷者 草 刈 龍 平

発行所 株式會社 河出書房新社／東京都千代田区神田小川町三の六

電話 東京（〇三）二九二一三七二一（大代表）／振替 東京二〇八〇二

印刷所 中央精版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

定 価 五六〇円



0093-037014-0961

目次

冬の狐火

5

蒼い断章

51

火の中の細道

113

非情の海

147

剥製

193

あとがき

246

裝幀
大住閑子

剝

製

冬の狐火

どぶろくに酔った若者たちの十碧じつぺき甚句を乗せた馬櫓ばろが、谷間の深い山毛櫨林ふなをくぐり抜けて、湖畔に出ると、雪の外輪山に囲まれた静かな湖水に、冴えた鈴の音が響き渡った。湖は、岸辺から凍りはじめて、夏のころに比べれば一と周りも、ふた周りもちいさくみえ、水は雪空を映して薄墨色に黒ずんでいた。

犬の毛皮の袖なし外套に、雪靴つよぐを履いた馬方が、櫓の上から、ほうい、ほういと棧橋の方へ手綱を絞ると、幌をかけた櫓が雪を軋ませながら傾いた。幌のなかで、若い女が、はしゃいだような悲鳴を上げた。

幌のなかには、酔った若者が三人と、その連れの同じ年頃の娘が二人と、それに、こんな雪に埋もれた山の湖に今時なににきたのか、よそ者の若い男と女の二人連れとが乗っていた。悲鳴

を上げたのは、若者たちの連れの娘の一人で、櫓が傾いた拍子に隣りの若者の肩に倒れかかったのを、若者がわざと胸のところを抱きとめたからだ。

彼等は五人とも、湖の対岸の螢部^{はたるべ}という部落の青年会の連中で、旧正月の演芸会に使う引幕で、谷の向うの町まで借りにいった帰りであった。そのついでに、知合いのところにも寄って、どぶろくをよばれてきたのだらう。借りてきた幕の包みを真中にして、幌の一番奥の薄暗がりにはひっそりしているよそ者にはお構いなしに、大声で唄を歌ったり、ふざけ合ったりしていた。

奥の二人連れは、馬櫓が町の駅前を発ってから二時間あまりの間、ときどき女が、自分の膝を枕にして毛布をかぶって寝ている男に、

「大丈夫？ 寒くない？」

と囁くほかは、ほとんど言葉を交さなかった。男は時折、毛布のなかで咳をした。軽い咳だが、一つ出ると続けざまに出て、容易にとまらなくなる。

女が、鈴の音が急に冴えたのにふと気がついたように、幌の破れ穴から外を覗いて、

「あ、音さん、湖。十碧湖よ。」

と、男の肩を軽くゆさぶったときも、男は、

「着いた？ やっと……。」

と呟きながら身を起こそうとして、途中で呟きこみ、それきりまた女の膝に顔を伏せてしまった。女は、なにもいわずに男の背中をさすっていた。

棧橋を前にした湖畔には、何軒かの家が雪のなかに埋もれていた。屋根に土産物屋の看板を上げていた家々だが、店の窓には外から雪除けの板が打ちつけてあり、人が棲んでいる気配がなかった。ところどころ床板が朽ちて穴が開いている棧橋には、魚獲りの小舟にまじって、塗りが剥げ落ちてしらじらとした小型の遊覧船が一艘、舫^もつてあった。

馬櫓が近づくと、その船のなから、復員者が持ち帰った軍用毛布をそのまま仕立てたものと一目でわかる、カーキ色の、だぶだぶの外套を着た初老の男が一人出てきた。

戦争が終って、まだ二年目の冬であった。馬櫓から降りてきた若者たちのなかにも、旧海軍の裾の短い外套を着ている者がいた。飛行服のズボンを穿^はいている者もいた。娘たちの一人は、絹の落下傘のきれはしをマフラーにしていた。馬方は脚にゲートルを巻いていた。

よそ者の二人連れは、毛布を畳んで包みにするのに手間どって、若者たちからしばらく遅れて櫓から降りた。女は、紺色の外套に黒のズボンで、男物の深いゴム長を履き、肩から斜めに布製の救急袋のようなものを吊して、両手に大きな風呂敷包みを提げていた。

裏に兎の毛皮を貼った防寒帽を除けば、外套も、ズボンも靴も、旧陸軍の兵士そっくりのなりをした男が、馬方に金を払った。彼はまだ二十一、二で、顔は頬がこけて蒼黒かったが、唇だけ

は少年のようにきれいな薔薇色をしていた。女は、三つ四つ年上だろうか。けれども、びんと張った頬がまだ固そうにみえた。馬方が釣銭を数えている間、女は男のそばから勝気そうな黒い目をきらきらさせて、さかんに湯気を上げている馬の背中をみつめていた。

船に乗るとき、だぶだぶの外套を着た船頭が訝しそうに二人をみて、

「あんたら、螢部へいくのかね？　この船は真直ぐ螢部へいっちゃうんだがね。」
といった。

「私たち、螢部へいくんです。乗せてくださいな。」

と女はいった。

船室の窓には硝子が一枚もなく、代りに板が打ちつけてあった。床には、畳の代りにぼろぼろの蓆^{じき}が敷いてあった。若者たちが幕の荷物を抛りこんでどこかへ行ってしまったあと、女は馬櫓のなかでもそうしてきたように、船室の隅に毛布で寢床を作って、男を寝かせた。ドアを閉めにくくと、ドアがなかった。女は自分の毛布も男にかぶせて、板壁に靠^たれて坐ると、男の頭を自分の腿の上に乗せた。

やがて、船はぶるぶると顛えながら棧橋を離れた。ドアのない入口から膚を刺すような風が吹きこんできて、女は外套の襟を立ててうつむいた。船頭が空罐に風穴をあけた火鉢を提げて入ってきた。

「旅の人には、寒いだろうと思ってね。」

女は驚いたように礼をいい、寝ている男に、

「音さん、火鉢があるの。手を焙あぶれば？」
といった。

男は毛布から顔を出して、「すみませんです。」と船頭にいったが、そのままじっと横になっていた。毛布から手を出すのも億劫おっくうそうだった。船頭は、どこで手に入れたのかアメリカ煙草を出して、空罐の火鉢から火を点けた。

「洋モクだけど、一本どうかね。」

男が、なにかいおうとして咳きこんだので、女が代りに会釈して、「やらないんです、この人。」といった。

「進駐軍に鉄砲うちの好きな将校がいてね。そいつが秋のうち、しょっちゅうジープできてたもんだから。」

船頭は弁解するようにそういうと、

「いま、復員してきなすったのかね？」

と目を閉じている男に話しかけた。

「はあ。」

と男は答えて、ちらとはにかみ笑いを浮べた。

「どこの部隊にいなすった。」

男がこの湖からさほど遠くない市にあった歩兵連隊の名をいうと、船頭は、ほう、といって不思議そうな顔をした。いま町にいる自分の幼馴染みの倅せがれもその歩兵連隊から復員してきたが、それも、戦争が終ってまもなくだったという。

「あんたはまた馬鹿に遅れたもんだな。」

「違うんです、この人の場合は。」

と、女が急いで話を引き取った。

「この人はずっと陸軍病院に入っていて、おととい退院したばかりなんです。」

「おととい？」

と船頭は、驚いたように二人の顔を見比べていたが、

「おとといって、いまでも陸軍病院ってやつはあるのかね。」

「いいえ。いまは国立病院ということになりましたけど、でも、いまでも陸軍時代の入院患者が大勢いるんです。」

「なるほど。軍隊がなくなったからって、背負いこんだ病氣も一緒に消えちまうわけじゃないものね。だけど、おととい退院したばかりで、すぐ旅をするんじゃないや大変だね。しかも、こんな寒い

「十碧くんだりまでね。」

男は目を閉じ、女は黙って炭火にかざした自分の手をみつめていた。

「船は、放っというていいんですか？」

やがて女が船頭に目を上げていった。

「ああ、若い船頭が三人もいればね。」

と彼は笑った。船はさっきの若者たちが動かしているらしい。

「で、螢部は、どこを訪ねていきなさるのかね？」

「湖月という旅館です。」

女が答えた。

「湖月っていうと、鳥さんの身寄りの人かね？」

「トリさん……。」

と女は、心許なげに男の顔に目を落したが、

「トリさんっていいますと？」

「鳥蔵だよ、ほら。湖月の力仕事をしている……。」

「いいえ。」

と女が、かぶりを振った。

「……鳥蔵のかみさんの知合いかね。」

「いいえ。」

「はあて。」

と船頭は、女の顔に目をしば叩いた。

「鳥蔵夫婦のはかに、いま、誰か湖月にいるのかね。」

女は、ちょっとした間、訝しそうに船頭をみつめていた。

「女中さんがいるでしょう？」

「女中？　女中なら去年のうちに残らず引き揚げてしまったと思ったがね。」

「引き揚げて……どこへです？」

「どこって、冬場の稼ぎどころへだよ。思い思いにね。湖月の女中ばかりじゃない。湖畔の旅館の女中は誰でも、冬場はよその温泉なんかへ稼ぎに出かけるんだよ。なにしろ、旅館が休業しまうんだから、いたって仕様がないわけだ。」

女の顔に、みるみる不安の色がひろがった。女は船頭に目を据えたまま、膝の男をゆさぶったが、男はとくにばつちりと目を見開いていた。

「ここはごらんの通りの山のなかだからね。」と船頭はつづけた。「秋の紅葉が済めば、そろそろ商売もおしまいなんだよ。十一月になれば、バスも運休になっちゃう。雪が降りはじめれば交通